自生資源の探索とキウイフルーツ育種への活用

片岡　郁雄

農学部教授　農学博士
専門分野　果樹園芸学

キウイフルーツを含むマタタビ（*Actinidia*）属約60種の大半は、中国大陸に自生分布しています。このうち*A. deliciosa* 種の種子が100年前にニュージーランドに持ち帰られて改良され、キウイフルーツとして国内外で広く流通しています。近年、果肉が黄色の*A.chinensis*種やその変種である果肉が赤いキウイフルーツなど品種の多様化が進んでいます。

キウイフルーツの類縁種は、日本国内にも自生しています。冷涼地には、ミヤママタタビ（*A. kolomikta*）、サルナシ（*A. arguta*）、マタタビ（*A. polygama*）が、温暖地にはシマサルナシ（*A. rufa*）が自生しています。サルナシは緑色無毛の果実をつけ、レモンよりも多くのビタミンCを含み、消化を助けるタンパク質分解酵素も含有しています。つるは強靭で、徳島・祖谷のかずら橋はこのサルナシでつくられています。一方、シマサルナシは紀伊半島、四国・九州の太平洋沿岸から沖縄にかけて自生し、褐色無毛の果実を着け、温暖・湿潤な気候に適応しています。本研究室では、全国の自生系統を探索し、収集した遺伝子資源の特性を評価し、キウイフルーツの品種改良や台木への活用を進めています。

サルナシ*A. arguta*

シマサルナシ*A. rufa*

シマサルナシとキウイフルーツの
種間交雑により選抜した新品種
「さぬきキウイっこ®」